かまくら女性史の会 Newsletter

第 135 号
2026 年 2 月 21 日　発行

〒248-0012　鎌倉市御成町 18-10
ＮＰＯセンター鎌倉　気付
メールボックス 26
E-mail: syokmat@yahoo.co.jp

≪豪雪地帯の長岡へ≫

NHK の朝ドラ「バケバケ」で描く上級士族の母子の困窮ぶりにはおどろかされるが、私の大伯母の生活を描いた『長崎屋かく子の青春日記』にも信じられないような事が書いてある。かく子の若くして亡くなった母の一番辛かったことだ。やっと１円位にしかならない「糸拵え」仕事を祖母とやる。糸をとりに行き、労賃を貰うのは若い母の役目であった。どんな格好で行くかと言えば、真冬なのに目の粗い薄布の寒冷紗の袖なし一枚と書いてある。時代が江戸から明治に変わったのは、呼び方だけでなく庶民の生活が根底から覆されたのではと著者三木暢子は分析している。大雪に覆われた長岡に思いをはせる。

2 月 1 日長岡駅に降り立つとアーケードの下は雪でいっぱい、大きなキャリーバックを引いては歩けないのでタクシーを奮発する。表町通りを左に曲がり次の信号で右にと言ったが、一つ手前を左に曲がり殿町の飲み屋街を入って我が家に進む。「このほうが早いです」と言われ料金は 800 円。着けば雪はシャッターの高さまである。キャリーバックを軒下に置き、秘密の入口より家の中に入る。翌日いつも迎えに来る 3 歳年上の人は体調が悪く、かわりに大町さんが迎えに来てくれた。大手通りと、国道 137 号線の交差点は 2 車線だが、積もりに積もった雪は真ん中に高く残り、大渋滞で大変だったと聞く。町中の無人野菜売り場には何も無く、大通り以外は雪の一山を越えねばならず、車が来たら車道の脇に避けるくらいしか方法がなかった。今回は雪かきはせずそのままにして帰ることにした。屋上に行く扉も雪が一杯で開けられない。後ろの二階家も雪が１ｍは積もっている。隣の駐車場は大きな道以外は出にくいのか、限られた車しか来ない。いつもだとこんなに積もれば雪下ろしを頼まなければならないのだが、誰も雪下ろしどころではない。１ｍ以上積もっていてもそのままで溶けるに任せている。暖房で暖かくなった屋根の雪が、時々ドスンと落ちる音が聞こえる。

4 日は陽も照って少し雪量も減った。帰るころ雪はシャッターの半分くらいまでになっていた。帰りは小さいキャリーバックで駅まで行く。改札前で荷物を点検したらやっぱり忘れ物はあった。食べ残しを置いていくわけにはいかないので詰めておいた夕食用のパックと、テレビの無い長岡の家でニュースや朝ドラを見るために持って行く、テレビの映るガラケー。年は取りたくないものだ。今日中に帰ればいいので、とりあえずタクシーで再び家に戻る。今度の運転手は表町で曲がる道をとる。信号待ちで止まっているうちに 1000 円になった。

ふたたび駅へ。ただただストーブを燃やし続けた長岡の３日間であった。

2026 年 2 月 11 日　かまくら女性史の会会員　前田セツ